

若年ユーザーによるインターネットを通じた 「離接的」コミュニティの形成 ——新宿・歌舞伎町「トー横界限」を事例として

山内萌(慶應義塾大学)

1. 問題の所在

本報告は、ソーシャルメディア上でなされる若年ユーザーのコミュニケーションが、現実の具体的な場所と往復しながら行われる様相を事例から指摘することで、若者のインターネット利用に関する社会的知見を提示するものである。

2000年代以降、パソコンや携帯電話をはじめとするデジタルメディアの発展に伴い、モバイルデバイスを使用したインターネット上のコミュニケーションに社会的関心が向けられてきた。2010年代から現在においては、スマートフォンの普及によって生じたTwitterやInstagram、TikTokなどソーシャルメディア上で観察される、若年ユーザーによる写真や動画の投稿を通じたコミュニケーションに研究対象が移行しつつある(天野 2019、佐々木 2022 など)。

若者とインターネットコミュニケーションに関する先行研究においては、教育社会学者の土井隆義(2016)が指摘する「常時接続社会」が分析概念として有用性を持つ。携帯電話を持つことによって、中高生などの若年ユーザーが場所や時間を問わず人間関係に接続することを求められるという土井の描出した状況は、デバイスがスマートフォンに移行した現代においても一定の有効性が指摘できる。

一方で、実際にソーシャルメディア上で行われているコミュニケーションに目を向けてみると、「界限」と呼ばれるコミュニティが、ソーシャルメディアおよび現実の特定の場所を往復しながら形成されている様子が観察できる。本報告ではそのようなコミュニティの中でも特にここ2、3年ほどで成立した「トー横界限」と呼ばれる、新宿・歌舞伎町の新宿東宝ビル横に集まる若者コミュニティに着目する。トー横界限をめぐっては2021年頃から暴行事件等が発生しており、マス・メディアのニュースで取り上げられることも多くなったことから、社会的注目が高い事例として位置づけることが可能である。

2. 事例

2.1 トー横界限について

トー横について取材を行っている佐々木チワワ(2022)によれば、トー横界限の発生時期は2018年から2019年頃である。Twitter上にハッシュタグをつけて自撮りを投稿する「自撮り界限」の若者が、オフラインで会う際の待ち合わせ場所としてよく使用していたのが新宿東宝ビル付近であった。ここに近隣の飲食店のバーテンダーやスカウト、ホストが加わりトー横界限の原型ができる。報告者は2018年頃からTwitter上の自撮り界限を観察しているが、トー横にいる若者の路上飲みを撮影した写真や動画が「トー横界限」という言葉とともに目につくようになったのは2020年頃、特にコロナの流行以降であった。

2021年にはマスメディアでトー横界限が取り上げられはじめる。週刊誌では6月にいち早くトー横

で発生した事件を扱っている（『FRIDAY』2021年6月25日）。さらに10月に発生したトー横関連の逮捕事件が大手新聞でも報じられ、以降トー横で事件が発生するたびにテレビでも報道がなされるようになった。さらには大阪の「グリ下界限」、名古屋の「ドン横界限」といった同質のコミュニティに関してもメディアで報道されるようになっていく。これらの報道ではトー横界限に集まる若者のイメージとして、家庭や学校に居場所がなく孤独な人物像が強調されることが多い。リアルな生活で行き場のない若者が集まることのできる場としてトー横が機能しているという説明である。本報告では従来の報道が焦点化するトー横界限のオルタナティブな場所性を、ソーシャルメディアとの往復という観点から補足する。そのために、報告者が2022年6月に聞き取りを行ったトー横に通う女性（以下A）の語りを参照する。

2.2 ネットとリアルの相互補完

Aによると現在のトー横界限では、Tik Tokで投稿される動画を見た中高生のユーザーが興味を持ち、歌舞伎町を訪れるパターンが多い。特に界限内で有名となった男性はインフルエンサーに近い影響力を持ち、彼らに会うことを目当てに集まるファンも一定数存在する。Aもまたその一人で、Tik Tokで知った界限の有名男性（以下B）に会うためトー横に行くようになったという。Aは動画を見て一目惚れし、Bにアプリ上でダイレクトメール（以下DM）を送ることで知り合った。Bは「DMだと塩（報告者注：塩対応の略でそっけないの意）だけど実際会うとめっちゃ優しい」。Aは毎週末トー横に通うようになり、B以外の人も仲良くなったという。

トー横界限で知り合った人とは「実際に会ってTwitter交換して、いいねしあったりするとやっほーってなる」。AはTwitter上のコミュニケーションと現実でのコミュニケーションを往復しながら関係を構築しているが、同時に「次もいたらやっほーみたいなの」とも言っており、毎回同じ人と話しているわけではないことがわかる。この様子からは、トー横界限の構成員が流動的であることがうかがえる。

Aはトー横界限の人に教えるTwitterアカウントとは別に自撮り界限としてのアカウントも持っており、そちらでは定期的に自撮りを投稿している。「トー横行ってるから自撮り垢いらないってならない？」という報告者の質問に対し、「それめっちゃ考えたことあるんですけど」と言いつつ、「週一でしか行けてないから、もっと頻繁に行ったら、友達とかもっとできてと思うけど、界限民とは言えない」と話す。「家にいる時は寂しくなって話し相手がほしい」ので、自撮り垢も継続しているという。それでも、「どこ界限の人かって聞かれたらトー横界限の人」と答えるAの語りからは、ソーシャルメディアと現実の場所を往復しながら、日常生活で生じる孤独を埋めていることがわかる。

また、自撮り垢でつながっている人をトー横に誘うことはないかという質問には、自撮り垢の人から会いたいと言われれば「トー横きてくれたら会えるよって言うつもりではあるけど」としながらも、「自撮り垢とトー横をつなげて自撮り垢の人と会おうと思ってない」という。Aは少し考えた後、「ネット友（報告者注：インターネットで知り合った友達の意）と会う時に交番の前で待ち合わせするのと一緒に」だと付け加えた。ここでは、自撮り垢の知り合いとは基本的にインターネット上で関係を完結させていることがまず指摘できる。その上で、もし現実で会おうとなればトー横が待ち合わせ場所になるというのは、トー横がインターネットの匿名性を担保しつつ実際に会える場所として、Aに心理的な安全性を与えていると言えることができるだろう。

3. 考察

人類学的手法を用いてメディア研究を行うダナ・ボイド（2014=2014）は、インターネット上で交流する若者のつながりを「ネットワーク化されたパブリック」と名付けた。ボイドがこの表現を通じて主張するのは、かつてアメリカのショッピングモールや公園が果たした若者の公共圏的役割を、ソーシャルメディアというインターネット上のパブリックが担うようになったことである。しかしながら、トー横界限の事例からは、インターネットを通じてネットワーク化されたコミュニティが、インターネットに留まることなく、現実の場所と往復しながら新たな構成員を獲得していることが指摘できる。

この点に関して、都市研究者の南後由和（2016）による「離接的群衆」概念を補助線として用いることができる。南後はハロウィン当日に仮装をして渋谷のスクランブル交差点に集まる若者たちが、現地で撮影した写真をソーシャルメディアに投稿しコミュニケーションしている様子を取り上げ、インターネットと現実空間の往復実践を指摘する。さらにアーウィング・ゴフマンの「離脱」概念を援用し、若者たちの様子をインターネットと現実の場所をめぐって接続と離脱を繰り返す離接的群衆として描出する。

南後が挙げた渋谷ハロウィンの事例は一時的に集合する群衆であった。本報告で取り上げたトー横界限の事例では、インターネットと現実の間でなされる接続と離脱が長期的なコミュニティの持続をもたらすことが指摘できる。しかしトー横界限の事例で重要なのは、このコミュニティの構成員は流動的であり、常に入れ替わりながらコミュニティが維持されてゆくということである。トー横という現実の場所に集まりながらも、そこではソーシャルメディアと同じような匿名性が担保されている。匿名的であることと実際に会うことの両立を可能にするのが、トー横界限という離接的なコミュニティなのである。

4. 結論

本報告ではソーシャルメディアと現実の特定の場所を往復しながら形成されるコミュニティの事例としてトー横界限を取り上げた。トー横とソーシャルメディアの往復を通じて形成、維持されるのは、離接的なコミュニティという匿名的でありながら現実につどう集団である。

上記の知見から推測できることとして、スマートフォンやソーシャルメディアを基本的なコミュニケーションツールとするデジタルネイティブ世代においては、ここまでみたような離接的な振る舞いの一般化という可能性がある。ハロウィンのような一時的なイベントやトー横界限のような特殊な事例にのみ発見できる振る舞いではなく、スマートフォンを持ちソーシャルメディアに日々アクセスする若者にとっては離接的な振る舞いが当たり前になっているとすれば、それらをコミュニケーション論や相互行為論としてさらに定式化することが求められる。上記の点を今後の課題とし、報告者による調査および理論的検討を引き続き進めてゆく。

参考文献

- 天野彬（2019）『SNS変遷史——「いいね！」でつながる社会のゆくえ』イースト・プレス。
Boyd, Danah（2014）*It's Complicated: The Social Lives of Networked Teens*, Yale University Press（=2014, 野中モモ訳『つながりっぱなしの日常を生きる——ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』草思社。）
土井隆義（2014）『つながりを煽られる子どもたち——ネット依存といじめ問題を考える』岩波書店。
南後由和（2016）「商業施設に埋蔵された『日本的広場』の行方——新宿西口地下広場から渋谷スクランブル交差点まで」三浦展・藤村龍至・南後由和著『商業空間は何の夢を見たか——1960~2010年代の都市と建築』

平凡社.

佐々木チワワ (2022) 『「びえん」という病——SNS世代の消費と承認』扶桑社.